

頑張る

農業法人

高齢化・後継者不足が進む京丹波町妙楽寺地区で、農業維持・地域活性化に向け昨年4月、農業者4人で農事組合法人「妙楽ファーム」を立ち上げた。

中山間地で空き家や休耕地を抱える中、地域特産野菜や特別栽培米をJA出荷や直売を行う他、農家民宿で都市住民との交流などに根強く取り組んでいる。

将来的には、近隣集落の営農組織と連携した広域化も計画するなど、地域活性化の拠点となることを目指す。

同町は府の中心部に位置する丹波高原内にある。その西部にある妙楽寺地区で、丹波黒大豆、京都大納言小豆、こかぶ、ソバ、米などを栽培して

いる。近年は早取り金時にんじん「京かんざし」の栽培にも取り組んでいる。

当地区は小規模農家中心で、少子高齢化や後継者不足が進み、空き家や休耕地も増えてきたことから、「京かんざし研究会」会長の城崎正継さん(62)が「個人では受託も出来ないので共同して農地を守ろう」と全農家に法人化を呼び掛けた。地元JA京都瑞穂支店やJA京都中央会にも相談して、さまざまアドバイスを受け、昨年4月11日に法人を設立した。役員は代表理事の城崎さん、理事の上田三雄さん(65)、黒井誠司さん(53)、監事の大西治さん(50)の4人。農繁期には2、3人のパートを雇用する。

農事組合法人 妙楽ファーム 京丹波町



特別栽培米の水田前で、人気の「京の舞妓ふじ」を手にする城崎さん(右から2人目)と役員ら

京かんざしを特産に

法人が管理するのは、かつて休耕していた農地。4畝。JAの協力とアドバイスによりパイプハウに力を入れている。また軟らかな食感と甘

農家民宿で地域活性化も

みのあるこかぶを、地区のブランドとして名が通るよう「京の舞妓ふじ」と名付け、JA直売所などで販売。レストランから予約も入るなど人気を呼んでいる。

さらに地域の空き家7戸を管理し、都市住民の田舎暮らし体験のための農家民宿に活用している。

修学旅行生の農業体験の受け入れも検討中だ。地域特産物の栽培で経営の安定化を図るとともに、地域活性化の拠点として法人を位置付けている。

城崎さんらは「JAの指導がありここまで来られた。今後は近隣の集落にも法人化を呼び掛け、将来は法人同士が連携し広く地域活性化の取り組みを進めたい」と大きな夢を元気に語る。

▽法人所在地 京丹波町妙楽寺沖田14の3。電話 0771(86)0274。